

会 議 要 旨

会議の名称	川越市立川越高等学校教育審議会第3回会議
開催日時	平成27年8月25日(火) 午後3時00分 開会 ・ 午後5時00分 閉会
開催場所	川越市立川越高等学校中会議室
議長(委員長・会長)氏名	会長 遠藤 克弥
出席者(委員)氏名(人数)	副会長 西澤 寛 石井 成人、伊藤 幾造、大竹 秀明、齋藤 清隆、澤田 隆、 土田 賢省、永瀬 慎二、永松 靖典(9人)
欠席者(委員)氏名(人数)	新保 正俊、笛木 正司 (2人)
事務局職員等職氏名	学校教育部 部長 小林 英二、参事 山本 康義 学校管理課 参事兼課長 中野 浩義、副参事 内山 久仁夫 指導主事 杉田 和彦、指導主事 栗田 大悟 市立川越高等学校 校長 関 俊秀、参事兼事務長 大嶋 美紀夫
会議次第	<ol style="list-style-type: none"> 1 開会のことば 2 議事 <ol style="list-style-type: none"> (1) 第2回会議の概要報告 (2) 協議事項 <ul style="list-style-type: none"> 市立川越高等学校における長期的ビジョンについて その他 3 連絡・報告 4 閉会のことば
配布資料	<ul style="list-style-type: none"> ・ 川越市立川越高等学校教育審議会第3回会議 次第 ・ 川越市立川越高等学校教育審議会 委員名簿 ・ 第2回会議要旨 ・ 川越市立川越高等学校教育審議会第3回会議 資料

議 事 の 経 過

1 開会

2 議事

(1) 第2回会議の概要報告

第2回会議の概要について、事務局から資料に基づき説明が行われた。協議の結果、原案どおりの内容で市のホームページで公開することについて承認された。

(2) 協議事項

市立川越高等学校における長期的ビジョンについて、事務局から資料に基づき説明が行われた。関連して次のような意見等が示された。

【意見等の概要】 (: 委員、・ : 事務局)

観光都市川越という点から見ても、「国際化」は外せないキーワード。「国際化」に「商業」というこれまでの伝統をどのように加味するかが重要。

昨今はバカロレアなども全国的に展開されている。大学入試だけでなく、実際に使える英会話によるコミュニケーション能力を高めていくことが必要。

「授業、学校行事、部活動」を全部挙げていくと総花的になる。現状を分析していく中で、どこに力を注がなければいけないのか、検討することが必要。

グローバル化、国際化は全国的な傾向。どのように対応していくかについては、新学習指導要領にも反映。グローバル化への対応が、伝統文化にもつながる。

川越はオリンピックの開催を控えており、「おもてなし」のためには英語力を付けることが必要。川越の高校に「観光科」ができると素晴らしい。現在大学にある観光学科に行って勉強できるような科目があるとよい。

川越には三味線や尺八、太鼓など様々な文化がある。部活動も含め、日本にはこういう文化があるということを高校で勉強できるとよい。川越はこんな風にやるよという特色あるものができるとうよい。

「川越にある」という特色を生かした伝統を発信することが必要。そのためには、使える英語力、コミュニケーション力が一つのキーポイントになる。

現在は「国際」や「英語」がつけば人が集まるという時代ではない。中身のところを研究していくことが重要。市教委と学校が、教職員を含めて長期的な取組や研究を行うことが必要。

英語はただやるだけでなく中身が重要。アクティブ・ラーニングを導入して、子どもたちが楽しく学べ、身に付いていく。使える英語や文章能力を身に付ける指導が必要。

昔の商業と違って、今の商業に対応していく学校になっていくことが重要。現在のカリキュラムがそれに応えられるか、見直しを行うことが必要。

これからの世の中に対応していくためには、グローバルビジネスというところを加味していくことが必要。そのための準備も、将来的に子どもが少なくなるという観点からすると、高等教育への対応が中心となる可能性もある。

長期的なスパンで考えると、変化はさらに加速する。英語の力が求められてくるが、英語の指導計画が、小学校5年生から高校3年生まで整理されて、変容してくることが予想されるので、こうしたことを見越したビジョンの検討が必要。

オリンピックもあり、本市を訪れる外国人観光客もたくさんいるので、高校のカリキュラムの中に、高校生のレベルで交流できる教育活動を取り入れるとよい。外国人との接点も視野に入れ、川越にある市立高校の特色を生かした教育が必要。

市立横須賀総合高校の「目指す学校像」は二本柱でつくられており、自分が日ごろ考えていることと似ている。こうしたものも参考にしながら、市立川越高校独自のよいビジョンがつけるとよい。

これまでの英語教育は、小、中、高で連続性がないから伸びなかった。グローバルビジネスをやるにしても、中学校程度の英語だけでなく、文章が書けるところまで高校、大学の教育が必要。カリキュラムの連携、積み上げ大いに賛成。

子どもたちが将来、何になりたいのか。大学に行きたい、あるいは就職して自分のできることをやりたいなどの目標設定ができる、子どもたちが考えられる場を提供できる学校になってもらいたい。

社会人や大学教授など、自分で何かつくり上げた人を招いてきっかけをつくることが重要。何かやれと言われてやるのではなく、こうしたきっかけで興味を持って、将来それを活かして自分たちが何かやって行こうと考えられる学校がよい。

東京国際大学、東洋大学、尚美学園大学など、大学教授や留学生も多い。こうした方々と異文化交流という高大連携を行うには川越はよい場所。観光や歴史や伝統を、うまくつなげる教育ができると非常に面白い。

関西の高校、大学では産学連携が進んでいる。高校生が将来何をしたいか考えるには、産学連携が有効。インターンシップなどをしながら、英語が必要か、大学進学が必要なのかがわかるというのも、世の中の変化に対応した学習の在り方。

外国人の講師を招いて英会話を中心とした授業をするなど、特色のある授業を売りにしていくというのも、これからの市立高校の発展につながる。

市立高校では公務員を志望する生徒が多いので、例えば3年生になると公務員のクラスがあって、公務員試験に強い、というのもよい。

最初から変わらず大切なものは、今後残していくことが必要。理念の中に、商業の色を残していくことが重要。普通科のみの受験校ではよさが失われる。「商業でも受験に対応できる」というのは特色になる。

スポーツなどの部活動は特色になる。甲子園に出たことのある高校は全国で何校あるのか。市立川越高校のネームバリューは全国トップ10に入るのではないかと。スポーツの活動を通して規律が身についているなど、プラスアルファが重要。

商業系の学科は一つに絞るにしても、何らかの形で残していけば、普通の大学に進学した場合でも、情報に行ったときにシステムがわかるとか、ビジネスを自分で立ち上げるときに経理システムがわかるというのは、特徴のあることである。

留学生がたくさん来るが、なぜ大学へ行くかという点、学歴を持っていると給料が高い。アメリカでも多くの生徒は高等教育へ行く。そういう時代である。

市立高校は7割が女子。少子化の中で結婚し出産する年齢なども考えると、高校でも実践的なプログラムが必要。川越にはお祭りがあり、子どもが浴衣を着る風情を残す意味では、帯の締め方が実践できるような教育を取り入れることが必要。

市民のニーズにどのように応えるかという視点が重要。大学進学率は女子の方が高い。女子がたくさん来る大学ほど優秀といわれている。市立川越高校は、女子が普通科にいる割合が高い。

保護者の期待は進路保障。生徒それぞれの希望がかなえられる進路保障ができる学校という理念が重要。市民の要望という意味では、社会の中で自立して生きていく力がしっかり身につく学校というところに保護者の願いがある。

根性のある部活動で揉まれた健全な生徒が社会で必要とされている。自分の子どもは普通科に入学し、ソフトボール部で根性を鍛え、将来は英語の先生になれたらと思っている。そういうところを、シンプルでわかりやすく表現するとよい。

市内唯一の市立高校として、この学校が市からいかに大事にされているかは、校舎を見ればわかる。行政や商工会議所など、学校外の地元の色々なところとの連携を、ビジョンの柱の一つにするとよい。

10年前と比べて、この学校の子どもたちのレベルが上がったと、多くの市民は思っている。大学に行っても、社会に出て就職することになる。より上がるように教育するためには、生きた社会コミュニケーションを培う環境が必要。

地域があって学校がある。市立高校も、市立の学校だけに市の学校としての役割がある。市のよい特色を教育課程に取り入れて生徒を指導すると特色が出る。市外生は卒業後も市に貢献できるような人材に育てることが重要。市立高校で教育したことが、市の発展に生かされるような仕組みをつくとよい。

地域の生徒を入学させることも大事な視点。市民の期待に応えるという一つの柱があるので、これをどう太くしていくか。100周年に向けての課題である。なぜ市外生が多いのか。

- ・ 市立高校の人気の高くなり、入学者選抜の倍率が高くなると、相対的に市内生の割合が低下する。市立高校がよくなればなるほど、市外から多くの志願者が集まることになる。学校をよくするほど市内生の割合が減少する。難しいところ。

他の市立高校も同じジレンマを抱えていると思うが、学校が魅力あるものになるほど市外から希望者が来る。このことで「市内優先」は、入学者選抜としてはできない。審議会でも魅力ある学校をつくらうと話をするほど市外生が増える。

川越は伝統があるので、連携をして市立高校は何らかの特色を出すことによって、川越以外の生徒が、市立高校では引け目を感じるという考え方もある。

長期的ビジョンとしては、この辺の県立高校へ行くより、市立高校へ行った方がレベルが高い、よいところへ行けるという進学率の高まり方もよい。

一方で、部活動という伝統もなくすわけにはいかない。甲子園を見ても、強い高校は混成チーム。市外から優秀な選手を入学させることも必要。

進学率、学習効果を高めるといった特殊性を志向することも重要。大学へ行っても国際ビジネスを学ばないともものにならない。英語で会話しなければならない時代。TOEIC など、英語を学びつつ、その過程を市立高校で過ごすという行き方もある。

大学に入ってくる学生が幼稚化しているが、大学では学校における生活デザインについて、民間企業を入れて教えている。企業を入れて、学生に企業と社会を味わわせることが重要。人間力を高める中で、得意なものを一つ発見させている。

大学のオープンキャンパスに親が来るが多くなっている。この傾向は高校からきているので、しっかりとした社会人を輩出するという観点から、高大連携をしてシステムづくりをやった方がよい。

自立させる教育が必要。自分で考えて主体的に頭を動かすことがアクティブ・ラーニング。これは自立と結びつくもの。これからの子どもたちが、実社会で自立できる、そのためにはどのような教育が必要なのかを考えていくことが必要。

中高一貫の場合は、中学校でこういう生徒を育て、高校ではこういうふうに変化させるという、6年間通しての設計が必要。市立高校の将来構想を議論する審議会で、性急に扱う話ではない。

中高一貫校の受験層は限られており、保護者はものすごく進学志向。高校側が一定の進学実績を持っていないところで中高一貫をやるのは、中学の生徒募集の段階で非常に厳しい。中学を併設した私学で苦戦しているところは多い。

中高一貫を志望する保護者は進学希望。普通科しか望んでいない。また、中高では体の大きさの違いもあり、体育館やプールが必要。施設に投資するなら全部普通科にしようとしたができなかった。残すなら中途半端ということでやめた。

保護者の期待は進学。どこと連携するか、進学クラスをつくるのか。また、グローバル化の中で、TOEIC をやるのか、普通科か。商業系学科にもやらせた方が面白いが、その場合普通科や学校全体の特色をどこにつくるのか。

市民の期待に応えるという観点は重要。進学希望が増えていく中で、50%ずつの生徒定員のままでよいのか。普通科の希望者が伸びていくのは事実。また、少子化なので一人の子どもにお金が使えなくなる。普通科が大きくならざるを得ない。

横須賀市の「目指す学校像」は秀逸。「地域に根差した学校を目指して活動し、郷土愛を育む」は川越市も同じ。国際社会のところでは、日本のことをよく知っていることが重要。川越市には喜多院など本物に触れて学べる環境がある。

日本のことをきっちり伝えることができる国際人になることが重要。喜多院や蔵造りに生徒が出て行って、ある一定時間以上アクションする。携わっている人を間近に見て教わるとともに、コミュニケーション力を養うことができる。

アクティブ・ラーニングは重要。地域に出て課題を解決する学習をする。インターンシップを通して生徒が川越を知る。そのことで自主性が育つ。川越にある様々な財産を使った教育を行うことが特色になる。

どういう形の学校にしていくかを明確にすることが重要。ビジョンというのは足がなければ成り立たない。足が大事。小さな足、それをどう組み合わせで行動化するかで、10年先、100年先のこの学校の姿が見えてくる。

3 連絡・報告

第4回は11月18日(水)の午後2時から市立川越高校で開催する。

4 閉会